

「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」の研究成果報告

森 章司

*本稿は立正佼成会が援助してくださっていた「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」が、昨年度（2010年度）末をもって一応の終結を迎えたため、2011年1月22日に立正佼成会の法輪閣会議室において行われた、その研究成果報告会の原稿として書かれたものです。報告会では時間の制約があって割愛せざるを得なかった部分もありますので、本稿には当日実際にお話させていただきまし内容以外のものも含まれております。

はじめに

お早うございます。17年もの長きにわたる物心両面においての立正佼成会や皆さんの支えがなければ、この研究は成り立ちえませんでした。おかげさまでいまだ不十分ではありますが、今回ご報告するような成果を上げることができましたことを本当に喜んでおります。衷心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

なおこの研究は私を代表者といたしまして、私の教え子の何人かに手伝ってもらっての共同研究という形で進めてまいりました。配布していただきました「資料」の[3]に、この間に私どもが刊行させていただきました論文名や資料集名を載せてあります。そこに担当者の名前が載っております、これらの人たちでございます。本来ならばこの人たちもここにいないければならないのですが、今はちょうど卒業論文の審査や入学試験の時期に当たっております、どうしても出席できないということでもありますので欠席させていただきます。ご諒承ください。

この研究の意味

それでは早速本題に入らせていただきます。この研究は「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」と申しますが、なぜこのような研究を志したのかということから、始めたいと存じます。

中村元先生の『ゴータマ・ブッダ』という大著や、水野弘元先生の『釈尊の生涯』などを代表として、釈尊の伝記を主題とした書物は外国のものも入れると240冊を上回るほどたくさんでおりますので、あるいはお釈迦さまの生涯はすでに明らかになっていると思っておられる方がいらっしゃるかも知れません。

しかしこれらの伝記の前半部分は菩提樹下の成道からはじまりまして、梵天勧請、初転法輪、ウルヴェーラ・カッサパなどの迦葉三兄弟の教化、マガダ国の王であったピンピサーラ王の帰依と竹林精舎の寄進、二大弟子といわれる舍利弗と目連の帰信と、釈尊が成道後はじめて生まれ故郷のカピラヴァットゥに帰られるところまででありまして、後半部分は釈尊が入滅される記事になっています。その中間にその他の記事が若干記されておりますが、それはわずかなもので、しかもそれらは年代記のなかに位置づけられておりません。したがって伝伝としては、前半部分と後半部分だけといってよいと思います。

スリランカの伝承によれば前半部分の成道からカピラヴァットゥへの帰郷まではちょうど1年間であり、後半部分の最後の入滅の記事もせいぜい1年くらいのものでありますから、釈尊45年間の布教活動の中心部分のほぼ43年間は空白のままに残されていることとなります。

原始仏教聖典

ところでわれわれがこの研究のために用いた原始仏教聖典と呼ばれるものは、南方の仏教徒が使っているパーリ語で書かれた経蔵と律蔵、それに中国において漢訳された経蔵に相当する阿含経と、四分律、五分律などという「律蔵」がこれに当たります。このうちのパーリの経蔵と律蔵に含まれる経の数は、数え方によって違いが出てきますが、資料の[1]に書いておきましたように約6,500経くらいになります。これが南伝大蔵経という叢書では46冊に収められています。漢訳は1つの経が『法華経』のように複数回翻訳されるという場合がありますので、これよりも多く、両方併せれば15,000くらいの数になるでしょう。

そしてこれらには釈尊が「どこで」「だれに」「どのような法を説かれた」ということが書かれている

のですから、実は原始仏教聖典は「釈尊の言行録」といってよいのです。いわばすべてが日記帳のようなものですから、これをもとに釈尊の伝記が書かれればよいはずなのです。ところが釈尊の完全な伝記がないというのはどうしたことでしょうか。

実はこの日記帳には肝心の「日付」が書いてないのです。ご承知のように仏教のお経はすべて「如是我聞。一時佛在王舎城耆闍崛山中。與大比丘衆萬二千人俱」というような形で始まります。この中の「一時」は「あるとき」ということで、時間が特定されていないわけです。もし「一時」のところに、釈尊が何歳の時にとか、成道何年に、ということが書き記されていたとしたら、釈尊の伝記はいとも簡単にでき上がるということになります。しかしどういう理由によるものかわかりませんが、日付の部分が失われているために、せつかく日記帳が残っていても、伝記が書けないということになってしまっているのです。

しかしパーリの「律蔵」の「大犍度」、漢訳では「受戒犍度」にあたりますが、これにはお釈迦さまが成道されるシーンから始まりまして、お釈迦さまがカピラヴァットゥに帰られるシーンまでが記されています。これは誰が見てもお釈迦さまが成道された直後のことであることは明らかですから、中村先生も水野先生もこれを利用して、『ゴータマ・ブッダ』や『釈尊の生涯』の前半部分を書かれたのです。

また「大般涅槃経」という経典は、王舎城の耆闍崛山すなわち霊鷲山で不退法を説かれるところから始まり、お釈迦さまがクシナーラーの沙羅双樹のあいだで入滅されるシーンで終わります。これは誰が見ても、お釈迦さまの生涯の最後の部分の記録であるということがわかりますから、中村先生も水野先生もこれを利用して、『ゴータマ・ブッダ』や『釈尊の生涯』の後半部分を書かれたのです。

実は2,000年も前からいくつもの「仏伝経典」と呼ばれるお経が編集されていますが、これらも全部同じです。要するに古今を問わず、洋の東西を問わず、釈尊の伝記が書かれた書物は「受戒犍度」と「涅槃経」をネタにしているのです。

この「大犍度」と「大般涅槃経」という経典は、先に申し上げましたパーリの経典が6,500ほどある、その中のたった2つにあたります。仏伝経典の作者も中村先生も水野先生も、お釈迦さまの伝記を書かれる時に、6,500もある原始仏教聖典の中のたった2つしか使っていないということになるわけです。これらの記述をどれだけ詳しく紹介するか、どのように解釈するか、どのように色付けするかによって、たくさん「釈尊伝」が生まれているにすぎません。

研究の目的

このように釈尊の生涯はいまだ明らかにはなっておりません。そこで私たちは釈尊の成道から入滅に至るまでの、釈尊の全生涯をカバーする「年譜」を書き、6,500のすべての原始仏教聖典が釈尊が何歳の時に説かれたものかということ特定した「目録」を作り上げたいというおそれた野望を抱きました。そして曲がりなりにもできあがりしましたのが、研究成果報告書として提出させていただきました「釈尊および釈尊教団史年表」と「釈尊年齢にしたがって配列した原始仏教聖典目録」です。

まだ「年表」は46ページという薄っぺらいものですし、「目録」の方も、原始仏教聖典のすべてがきちんと釈尊の何歳の時と特定できているわけではありません。ほとんどの経典が「何歳から何歳くらいまで」の経とか、「何歳以後の経」といった程度に終わっておりまして、特定できているのは1割弱程度のものではないかと思います。しかも1つ1つの経の内容は、私たちがコンピュータに蓄積していた生のデータをそのまま編集したものですから、万事整備されておりませんので、公表させていたがくところまでには至っておりません。

しかしその質はともかくとして、「釈尊の生涯をカバーした年表」とか「釈尊がいつ説かれたかということ基準にして配列した聖典目録」などを作ることができるなどは、世界中の仏教学者のだれも夢想だにしなかったことだと思います。いまだ不十分なものですが、仏教の歴史2500年の間に誰もなしえなかったことを成し遂げたということで、共に誇りに思っていてよいのではないかと思います。

研究の方法

ところで皆さんは、これら「年表」や「目録」がどのように作られ、どの程度のものに仕上がっているのかということにもっとも強い関心をお持ちではないかと思います。それが荒唐無稽なものであるならば、

まったく意味はないからです。

そこでまず考え方の基本のところからお話させていただきます。たとえば原始仏教聖典には阿闍世（アジャータサットゥ）という人物が出て参ります。提婆達多とつるんで父であったマガダの国王ビンピサーラを殺して王となったとされる人物です。ところで経にはこの阿闍世が「太子」の身分で登場するものもありますし、「王」の身分で登場するものもあります。私たちはこの研究によって、提婆達多の破僧事件は釈尊 72 歳、成道 38 年目のことであったと考えておりますので、阿闍世が王子として登場する経はそれ以前の経ということになりますし、王として登場する経はそれ以後の経ということになります。もちろん破僧そのものを描く経典は釈尊 72 歳の時の経であるということになります。

またわれわれは二大弟子とよばれる舍利弗・目連は、釈尊より先に、釈尊が 77 歳の時に亡くなったと考えておりますので、彼らが登場する経はそれ以前ということになります。

また舎衛城の祇園精舎が仏教のサンガに寄進されましたのは釈尊が 48 歳の時のことでしたから、舎衛城が舞台となっている経はそれ以降ということになります。

あるいは制度的なことを申し上げれば、釈尊の育て親であった摩訶波闍波提が比丘尼になることが許され、最初の比丘尼となったのは釈尊 58 歳のことと考えておりますので、比丘尼が登場する経はそれ以後の経ということになります。

このように経典に残されている場所とか登場人物とか制度に関わるさまざまな記述を手掛かりにして、刑事コロンボが犯人を追いつめるようにしていけば、すべての経の「いつ」が特定できなくとも、「いつごろ」ということはわかってくるであろうというのが方法論の基礎です。

もちろん提婆達多の破僧事件が釈尊 72 歳の時で、最初の比丘尼が釈尊 58 歳の時に誕生したという年次推定そのものが難しいわけですが、そこまでお話しすると、それだけで何時間もかかりますので、それは省略させていただきます。すでに論文を発表してありますし、ホームページにも掲載してありますので、もし関心があればそちらの方をご覧ください。

なお釈尊の生涯中に教えがもし変化しているとすれば、どのように変化をしたかという要素も加えれば、さらに面白い結果が出てくるでしょう。しかしこれはまだ調べておりません。「目録」ができましたので、これによってそれがあぶり出されてくるかも知れません。

今までこれがなされなかった理由

しかしこのようなことは誰もが思いつくことで、私たちだけにしか思いつけないというものではないと思います。おそらくちょっとした頭の持ち主なら、だれしも考えることでしょう。それにも拘わらず仏教の歴史の中で今まで誰もやろうとしなかったのはどうしたわけでしょうか。これには次のような理由が上げられると思います。

1つは、原始仏教聖典の数があまりにも膨大であるということです。先ほどパ・漢併せた原始仏教聖典の数は 15,000 ほどになると申し上げました。要するに日付の部分を失った日記帳が 15,000 ページもあり、この 1 ページずつに書かれている手掛かりを全部記憶しておかなければならないとすれば、誰でも二の足を踏むでしょう。

しかも 1 つ 1 つの経にある手掛かりは、他の 15,000 の経に書かれている手掛かりと複雑に関連しあっているのですから、1 つの経を分析するためには常に 15,000 の経の手掛かりとどのように関連しあっているかを考えなければなりません。よく刑事物のテレビ番組で黒板に事件に関連する人物と場所と時間の関係図を描いているシーンがでてまいります。それが 500 人の人物と、500 の場所、それに時間は 45 年ということになれば、それを黒板に描いて処理することは不可能でしょう。それをひとりの人間が頭の中で処理することも、超人でないければ不可能です。しかし性能の高いコンピュータを誰もが気軽に使える時代になって、誰をも超人にしてくれる時代になりました。2000 年前のお坊さんはもちろん、中村先生も水野先生もコンピュータはお使いになっていなかったでしょう。中村先生や水野先生がこのような研究をなされなかった第 1 の理由です。

また第 2 の理由は、中村先生や水野先生が共同研究という手法を用いられなかったということがあげられると思います。というよりも共同研究という手法は考えられなかったのです。おそらく中村先生も水野

先生も膨大なカードをお作りになっていたであろうと思います。実は私もコンピュータを使い始める前までは膨大なカードを作っていました。しかし私のカードは私のものであって、たとえ私が私のカードを開放しても、他の人には使いこなせません。また使いこなせたとしても、調べものをするときにいちいち私のところに来てもらわなければなりません。またカードは一度カードボックスからとり出して、それを床一面に広げて、あっちにやったりこっちにやったりした作業を終えると、1枚1枚を元あった場所に戻してやらなければなりません。1つの調べものをするのに、何百枚のカードをとり出して、それをまた元に戻すのはたいへん面倒で、ついつい別のところにストックしておく羽目になるというのが常でした。ということになるとせっかくのカードが死んでしまうことになります。ところがこれもコンピュータのよいところで、いったん蓄積されたデータベースはほんの数秒でCDにコピーして、誰でもいつでも自由に使えるようになりますし、いちいち元のカードボックスに戻す労力もいりません。コンピュータのデータは、フォーマットさえきちんとしてあれば、どのような形式に並べ替えるのも自由自在で、それも瞬間的にできます。共通のソフトとデータ作成の基準を統一しておけば、複数の者が協力して1つのデータベースを構築することもできます。共同研究にはこのデータベースの共有ということが非常に大切で、コンピュータは共同研究をも容易にしてくれたわけです。

もちろん共同研究をしなければならない理由は、膨大な原始仏教経典やその注釈文献などからできるだけ厳密にデータを収集するにはできるだけ多くの協力者が必要だからです。またその知識を共有しさえしておけば、1人ではやれない多方面の研究テーマを、同じデータを用いて、同じ研究方法でやることができます。1人では凡庸でも、3人寄れば文殊の智慧を実地に実践できるわけで、特に酒を飲みながらの議論で、この効用を実感いたしました。このような共同研究をおやりになれなかったというのが、中村先生や水野先生がこのような研究をなされなかった第2の理由だと思えます。

しかしこのような共同研究は言うは易いですが、なかなか実施することはできません。それなりの資金が必要ですし、場というものがなければなりません。そしてこの2つ条件を提供して下さったのが立正佼成会でございます。したがってこの夢のような研究が可能になりましたのは、コンピュータと立正佼成会のおかげといてよいと思えます。改めて御礼を申し上げます。

基礎研究

ところでこのようないわば道具立ては整ったとしても、経典の「一時」を特定する決め手にはなりません。コンピュータにデータ・ベースが蓄積されても、コンピュータが勝手に処理・分析してくれるわけではありません。実はできたらそこまでやりたいと考えておりましたが、そのシステムを構築することはできませんでした。したがってわれわれはまだコンピュータの機能のごく一部分の、検索とコピーとソートとリレーションといったごく初歩的な機能しか使いこなせていないのではないかと感じております。

したがってコンピュータに蓄積したデータを使いこなすためには、結局はわれわれの頭を使うしかありませんでした。機械的に処理できませんでしたので、データの1つ1つを私たちの頭で分析するしかなかったということです。あるいは経典の文章の背後や行間は私たちの頭を使って明らかにするしかなかったといってもよいかも知れません。そしてこの面を端的に表現するキーワードは「基礎研究」です。

資料の[2]と[3]に研究経過と研究成果をつけておきました。これをご覧ください。この研究は当時中央学術研究所の所長をされていた天谷さんの時に始めることができましたようになりましたが、当初は天谷さんも、そのすぐ後に次長をされることになった沢田さんももちろん、私自身もこんなに長い期間をかけるつもりはございませんでした。5年くらいの間に一応の決着をつけるつもりで、はじめはパーリ聖典だけを資料にしようと思っておりましたが、やっぱり漢訳も使いたい、いやいや仏伝経典などの後の文献もきちっと見ておかなければならないというように、だんだん欲がでてきて、データの集積に手間取り、最初の報告書を出させていただきましたのは研究が発足してから4年目のことでした。そしてまたその後しばらく6年くらいの間は、報告書が出るといえば「資料集」ばかりで、論文といえれば由旬の長さはどうぞらいかとか、婆羅門の修行者はどんな生活をしていたかとかいうような、お釈迦さまの伝記とは直接関係のないものばかりで、天谷さんや沢田さんはやきもきされていたのではないかと思います。ひょっとするとこの10年間くらいは、森の詐欺にあったと感じられていたかもしれません。

しかし今さらの言い訳で申し訳がないのですが、このような基礎的な研究こそがこの研究の背骨になっているということで、お許しいただきたいと思えます。

基礎研究につきましてはいくつも申し上げたいことがございますが、ここでは2つだけ紹介させていただきます。1つは釈尊の行動パターンを明らかにしたことと、もう一つは釈尊の生涯を釈尊教団の形成史と発展史に重ね合わせる事ができたということです。このような視点は、中村先生も水野先生も、お持ちではなかったと思えます。

釈尊の行動パターン

まず第1に基礎研究によって、釈尊の行動パターンが明らかになったということについてお話させていただきます。

資料 [4] に書いておきましたように、漢・パの原始仏教聖典のうちで釈尊がおられたところが明示されている経の数は10,861でありまして、そのうち舎衛城を舞台とする仏説の原始仏教聖典の数は5,784で、全体に占める割合は $5784/10861=53.25\%$ ということになります。また王舎城を舞台とする仏説の原始仏教聖典の数は3,539で、全体に占める割合は $3539/10861=32.58\%$ でありまして、この2つの都で全部の経典の85%を占めます。

したがって釈尊の活動地の中心は舎衛城と王舎城で、釈尊はこの間を何度も何度も往復されたであろうと推測しなければなりません。しかしそれをたとえば1年の間に3回も4回も往復されたと考えるか、あるいは2、3年に1回しか往復されなかったと考えるかによって、釈尊の生涯の印象はものすごく違ってきます。もし前者ならば釈尊は現代の総理大臣のように、今日はここだと思ったら明日はそちらというような、慌ただしい人生であったことになりまして、後者ならガンジス河の流れのように比較的ゆったりとした人生であったということになります。

このどちらのパターンであったかを知るためには、まず釈尊は1年間をどのように過ごされたか、ということがわからなければなりません。結論のみを申し上げればインドには雨期があるので、その期間中は遊行できません。また雨期の前後には雨期に入る準備をしたり、雨期が終わったら衣替えをしたりしなければなりませんし、さらにその前後には全国から比丘たちが釈尊に会いに集まりますので、釈尊は彼らに対応しなければなりません。したがって釈尊は1年間のうちで、自由に遊行ができるのは3ヶ月しかないということがわかりました。

それでは次に釈尊は3ヶ月を使って、どのように遊行されたかということになります。舎衛城と王舎城の間の距離は北のクシナーラー、ヴェーサーリーのルートを取るのと、ベナレスを経由するガンジス河沿いのルートを取るのとでは若干の相違がありますが、両方とも約600kmくらいのもので、江戸時代の参勤交代の大名の移動距離は1日に40kmくらいであったといひます。これは時速5kmで1日8時間歩くという見当になります。釈尊もこのスピードで遊行されていたとするならば、片道は15日で往復は30日、3ヶ月の間に少なくとも計算上は3往復することができることになります。

しかし1日3時間くらいしか歩かれなかったし、寄り道したり、一ヶ所に数日とどまることがあったということも予想されますから、1日にせいぜい平均10kmしか移動されなかったとすると、片道だけで60日かかり、とても往復はできないということになります。

このように1日の移動距離を知るためには、お釈迦さまは1日をどのように過ごされたかということも問題となるし、遊行はどのように行われたのか、1人でさっさと歩かれたのか、大名行列のように大人数だったのか、舟や馬車に乗られたのかなどということも問題となります。詳細は省略しますが、結論は後者でございまして、釈尊の生涯は非常にゆったりとしたものでした。

釈尊の行動範囲は、資料 [5] の地図に書きましたような範囲でありまして、それほど大きくはありません。しかし1日に平均して10kmくらいしか進まなかったとすると、西のほうのクル国とか、パンチャラ国、あるいは東の方のアンガ国などには、そうたびたび行かれたはずはないということになります。ある経典には釈尊はスーラセーナ国のヴェーランジャーというところから、ガンジス河にそって下りまして、パヤーガの渡し（今のアッラハバード）を通り、ベナレスを経由して、ヴェーサーリーに行かれたという記述があります。おそらくこれがもっとも長い遊行であったであろうと思われませんが、この遊行は優に3ヶ

月はかかったであろうと推測されます。経典には淡々と記述されておりますので、この遊行の苦勞がわかりませんが、このように釈尊の行動パターンを知ることによってこの遊行はたいへんであったろうなということが想像されるわけです。なおこの年は西インドのヴェーランジャーでも飢饉でありましたが、東の方のヴェーサーリーでも飢饉でありまして、この年はヒンドゥスタン平野は大飢饉に見舞われていたことがわかります。私たちの結論では釈尊 56 歳から 57 歳にかけてのことです。

釈尊教団形成史

基礎研究の成果の第 2 は、サンガの形成史と発展史を釈尊の生涯に重ね合わせることができるようになったということでございます。

これを年表に表してみますと資料 [7] のようになります。先ほどスリランカの伝承では、成道からカピラヴァットゥへの帰郷までは 1 年の間の事柄と解釈していると申し上げましたが、サンガの形成史と重ね合わせますと、年表に書きましたように、14 年間ぐらいのことにならざるを得ません。

ちょっと余談になりますが、律蔵が規定するサンガの厳密な定義は「羯磨を行いうる比丘あるいは比丘尼の集団」ということになります。羯磨というのは kamma (パーリ) あるいは karma (サンスクリット) でありまして、行為を意味します。仏教ではこれを普通「業」と訳しますが、これは個人の行為を表す場合でありまして、集団の行為を表す時には「羯磨」と音写して、区別しているわけでございます。

このサンガとしての行為は資料の [6] に書いておきましたように、①議題に必要な人数が揃っており、②その時点にその界 (sīmā 縄張り) にいるサンガの構成員が 1 人の漏れもなく出席していて、③その全員が賛成するという 3 つの条件が具わった時に有効となります。たとえば比丘になってその集団に加入したい人がいて、その人を比丘として認めてよいかどうかという議題を扱う場合には、10 人以上のサンガでなければならないと定められています。これを「十衆白四羯磨具足戒」といいます。これが「律蔵」の定める正式の具足戒の方法です。「具足戒」というのは一人前の出家修行者である比丘としての資格が具わったということなのです。

このようなサンガの意思を決定する方法は、この「十衆白四羯磨具足戒」が定められたときに初めて行われましたから、正式なサンガはこの時に成立したということになります。サンガというのは羯磨を行うことができる集団であり、羯磨の方法はこの時に初めて定められたからです。

そして先ほどお話しました「律蔵」の「受戒羯度」は正確に言えば、この「十衆白四羯磨具足戒法」がどのように制定されるに至ったかということを中心としているわけでありまして、「仏伝」ではなく「釈尊教団形成史」なのです。「教団形成史」に関係しない事績は、ここからは除外されているわけでありまして、ここから除外されているものも加えてやらないと本当の釈尊の伝記は書けないということになります。

ともかくこのような視点で「受戒羯度」を読みますと次のようになります。

「律蔵」の「受戒羯度」が仏の成道から始まるのは、仏典の編集者たちにとって、このとき「三宝帰依」の対象である「仏宝」が成立したという認識があったからです。それではなぜここに「仏宝」が成立したことが書かれなければならなかったかといえば、「十衆白四羯磨具足戒法」が制定される以前には、「三宝」に帰依することを表明することが比丘となる条件と定められていたからです。これを「三宝帰依具足戒」といいます。釈尊は成道後最初の雨期をこの菩提樹下で過ごされました。

次に初転法輪が記されておりますのは、これによって三宝帰依の第 2 の対象である「法宝」が成立したという認識があったことを示しています。初転法輪では四諦が説かれましたが、後の仏教徒にとっては四諦こそが「仏教 (仏の教え)」なのです。

そしてこれによって五比丘が次々と「善來比丘具足戒」によって出家して釈尊の弟子となりました。善來比丘具足戒というのは、出家を希望する者に、釈尊が「よく来た比丘よ、法はよく説かれた。わたしのもとで正しく苦しみを滅するために励めよ」といわれることによって比丘となることを許されるという方式でありまして、「三宝帰依具足戒」が許される以前には、これが具足戒の方法でありました。

なおこれは釈尊個人の判断で釈尊がご自分の直弟子にするという方法でありまして、後に「十衆白四羯磨具足戒法」が正規の具足戒法となったわけですが、釈尊にはこの特権が入滅するまで残されておりました。

た。原始仏教聖典では釈尊と日常生活を共にする比丘は「1250人の大比丘サンガ」とか「500人の大比丘サンガ」と表現されておりますが、これがそれによって形成されたサンガです。年表では「釈尊と直弟子たちのサンガ」と表現してあります。

この五人が釈尊の弟子になった後、釈尊は続いて無常・苦・無我の教えを説かれまして、彼らが解脱を得ました。「受戒^捷度」にはそのとき「世界に6人の阿羅漢が存在することになった」と書かれています。仏典の編集者たちはこの時、帰依の対象となる第3の「僧宝」が成立したと認識しているわけです。これは仏と仏の法によって聖者となった者たちという観念的なものでありまして、具体的なサンガではありません。

このようにして釈尊は鹿野苑において第2回目の雨期を過ごされまして、雨期が明けると直弟子たちを「1つの道を2人して行くなかれ」と地方に教化に出されまして、自らはウルヴェーラ・カッサパを教化するために6年間の修行をしたウルヴェーラーに戻られました。ウルヴェーラ・カッサパは螺髻梵志と呼ばれる出家修行者でありまして、なかなか手ごわくその過程で第3回目の雨期を過ごされました。しかし雨期が終わる頃にその折伏に成功されて、弟のナディー・カッサパとガヤー・カッサパも釈尊に信従するようになりました。「律蔵」がこの記事を記しますのは、他の宗教で出家している者も、仏教の比丘となる場合はきちんと仏教のしきたりに従って、もう一度出家し直さなければならないということを示したものです。

三迦葉を教化された後に釈尊はウルヴェーラーの近くの町ガヤーの近くのガヤーシーサに移られました。ウルヴェーラーは小さな村でしたので、大勢の出家者たちの生活を支えることができませんので、大都会であったガヤーに移られたわけです。そしてそこに6年ほど留まられました。諸国に布教に出した弟子たちが出家希望者を連れて還ってくるのを待っていなければならなかったからです。釈尊はこれらの出家希望者をすべて「善來比丘具足戒」で出家させられましたから、この頃の仏教の出家修行者のすべては「釈尊と直弟子たちのサンガ」のメンバーとなったわけで、このころはこれが「釈尊教団」でもあったわけです。立正佼成会でいえば、まだ本部以外に教会がなかった時代に相当するでしょう。釈尊はこの6年間は彼らの教育に専心されたということになります。

このような状態が6年ほど続いたわけですが、諸国に布教に出された弟子たちが行ったり来たりするのに疲れ果てたのを見られて、釈尊は出先の各地で弟子たちが三宝帰依によって、自分たちの弟子を取ることを許されました。これが「三宝帰依具足戒」で、釈尊成道後9年目のことでした。そしてこの時はじめて「仏弟子たちのサンガ」の祖型が形成され、地方に教会ができるもととなりました。なおこのときにこの地球上に存在する仏教の出家者からなる「釈尊教団」というものの祖型も形成されたということになります。このときインド各地で釈尊の直弟子たちによって教化された比丘たちは、釈尊の顔を見たこともないし、声を聴いたこともなかったでしょうが、しかし「三宝に帰依する」ということで1つに統一されていたわけです。

このような経過をへて、「十衆白四羯磨具足戒」が制定されることとなりますが、以上のような経過が物語られるのは、「十衆白四羯磨具足戒」が制定される以前に、これらとは異なる方式で比丘となった者もまた有効であるということを示すためです。現代の法律ではこれを「不遡及」の原則といいます。またこのような因縁譚が記されるのは、法律には前文があるように、この法律の立法趣旨を物語ろうとしたものです。

このように比丘の集団が規則を有する組織的な集団となったのは、釈尊が成道されてから12年後のことでありましたが、これには次のようなきっかけがありました。釈尊は直弟子たちに自分の弟子を取ってよいと許されましたので、直弟子たちはインド各地で自分たちの弟子を取りました。しかしこの時にはまだ出家を許してよい条件も決められていませんでしたし、出家修行者がどのように暮らすべきかという生活規則もなく、もちろんサンガ運営の規則もできていませんでした。そこで現に一家を支えている壮年男子も、将来の働き手として期待されている青年も、手当たり次第に出家させるということが生じて、そこで「ゴータマがやってきて、夫を奪い、子を奪い、家系を断絶させる」という轟々たる非難が生じるようになりました。また出家修行者のなかにはだらしない服装をして、意地汚く食を乞い、まるで礼儀作法を弁えていない修行者が続出して、これにたいしても激しい非難が生じるようになりました。釈尊の目の届か

ないところでさまざまな不行跡が起こってしまったわけです。

そこでまず手始めに釈尊は出家したら 10 年間は和尚について、日常生活を共にして教育を受けなければならないこと、和尚となる者は出家して 10 年以上を経過し、それなりの境地に達していること、という和尚と弟子の制度を制定され、次に具足戒を与える場合はそのサンガの最低人数は 10 人であること、具足戒を与えてよい条件として満 20 歳以上の男子であること、伝染病を患っていないこと、犯罪者でないことなどという規則を制定されました。この時になってサンガは名実ともに組織的な集団に生まれ変わったといえることができます。「仏弟子たちのサンガ」は羯磨によって集団の意思を決定できる、いわば法人格を有する集団なのです。また私が「釈尊教団」と呼んでおりますのは、地上に存在するすべての「仏弟子たちのサンガ」と「釈尊と直弟子たちのサンガ」を統括したのですが、これもただ三宝帰依という抽象的なもので結ばれたものではなく、律蔵という共通する規則を守っていることによって結ばれた組織体になりました。しかし今から 2500 年も前のインドで、しかも律は随犯随制とよばれておりますように、日常的に改廃されるこの規則を全国のサンガが等しく守るということは並大抵なことではありません。しかしこの規定はいわば法律ですから違反すれば罰則が課せられます。この罰則がある規定にそれぞれのサンガが恣意的に対応しているということでは、統括組織としての「釈尊教団」は機能を失うことになります。そこで全国のサンガが随犯随制される律の規定を、速やかに周知・徹底されるシステムも作られました。それが布薩であり雨安居であり、雨安居の最後に行われる自恣であり、遊行でした。時間がございませんので、これにつきましてはすでにご報告させていただいております「モノグラフ」をぜひお読み下さい。

なお先ほど釈尊の行動範囲はそれほど大きくなかったと申し上げました。地図に示しました仏教中国とよばれる地域に限定されていたわけです。しかしそれは結果的にそうだったというのではなく、行動パターンやサンガのことを考えますと、それが必然であったといえることができます。まず雨安居の前後には全国から比丘が釈尊のところにやってきます。釈尊が辺地に行かれるとそれは大変難しいものになりますから、お釈迦さまは中央におられる必要があります。また釈尊はいつも大勢の比丘に囲まれた「釈尊と直弟子たちのサンガ」として行動されておりました。1,250 人や 500 人は大げさですが、一桁少なく読んだとしてもかなりの大人数ですから、この大人数の比丘たちの 4 ヶ月の生活を丸ごと面倒見なければならないとすれば、それは大都会でなければなりません。舎衛城や王舎城が釈尊の活動の中心になるのは当然なのです。

パーリの注釈書がいうように、このようなシステムが釈尊成道後 1 年の間に作られたとはとても考えられません。しかも 1 年では出家して 10 年たった比丘というのは存在しないはずですから、和尚と弟子の制さえも作られるはずはありません。したがってこれは少なくとも最初の仏弟子ができてから 10 年は経過していなければならないということになります。

ここまでではサンガの形成史でありまして、これからがサンガの発展史であります。時間がなくなりましたので、以下は省略させていただきます。ただし『涅槃經』は釈尊のサンガに対する遺言書のような内容をもつお経で、このなかにかくつかの遺言が含まれているわけですが、その 1 つだけを紹介させていただきます。それは釈尊が亡くなられる時に阿難に対して、「もはや私たちの師はいないと思うかも知れないが、そう考えてはならない。あなたたちに私が説いた法と律が、私の死後のあなたたちの師である」とおっしゃられたという言葉です。それまでの釈尊教団は問題が起きるとその都度釈尊にお伺いをたてて、釈尊が直接その決済をなされておりました。そういう意味では釈尊教団というのは釈尊の指揮命令下にある集団であったわけです。そこで釈尊は自分がなき後は、自分が説いた法と律がサンガの統括原理になるのだぞと、遺言されたわけです。その時に釈尊は「あなたたちが望むならば、些細な戒律の条項は廃止してもよいぞ」とも申されました。このような釈尊の遺言を受けて、摩訶迦葉は釈尊滅後にこれからの教団がよりどころとすべき法と律に異論が出るようなことではまずいと考えるて結集を行いました。そのときに些細な条項を廃止してよいという遺言も紹介されましたが、何も足さない、何も引かないという方針を決めました。すなわち釈尊滅後によりどころとする法と律がここに確定されたわけです。したがって見方によっては、釈尊教団はこのとき釈尊の指揮命令下にある集団から、仏の教えをよりどころとする「仏教教団」に変わったということになります。これが現在まで連綿として続いている南方上座部の仏教です。

以上のように、サンガの形成史と釈尊の生涯を重ね合わせてみますと、また別の釈尊伝が見えてくるわけでございます。

おわりに

この他、基礎研究といたしましては、釈尊がどこで雨安居を過ごされたかという雨安居地の調査や、釈尊がどこでどんな経を説かれているかという調査、あるいは当時のインド人の就学年齢は何歳で、結婚の平均年齢は何歳というライフサイクルの調査などを、それぞれ徹底的に行いました。先ほどの行動パターンやサンガの研究なども含めて、これらはすでに「モノグラフ」において報告させていただき、そのほとんどはインターネット上のホームページにアップしてございますので、ぜひともご覧いただきたいと存じます。そしてこれらが、釈尊や仏弟子たちのさまざまな事績の年代推定のためにたいへん役に立っていることはいうまでもありません。いわばこれらは外堀を埋め、内堀を埋めるという作業でございまして、このような作業をやっておりましたので、最後の仕上げの「年表」と「目録」の編集という本丸攻略は1年もかかりませんでした。

このように今回提出させていただきました「年表」と「目録」は、きちんとした学問的基礎に立った、しっかりしたものであると考えておりますが、評価は皆さんに委ねたいと存じます。

しかしながらこの「年表」と「目録」はいまだ外部にまで公表する段階には至っておりませんし、何よりも肝心の私たちの「釈尊伝」を書いておりません。私はやりたかったこと、やらなければならないことの95%はやらせていただいたとっておりますが、残りの5%がこれらの仕事です。いわば画竜点睛を欠いているわけでございます。そこでこの残務整理を行うために、自主的な研究会である「釈尊伝研究会」というのを立ち上げまして、すでに2回の研究会を行いました。この研究会も中央学術研究所に本部を置かせていただきまして、今まで通りにコンピュータや書籍を利用させていただけることになっております。私も歳をとりまして、そう長い間研究は続けられないと思いますので、5年を目処に何とかまとめたたいと考えております。

これをもちましてこの研究の成果報告を終わらせていただきたいと存じます。長い間のご支援と本日のご静聴、まことにありがとうございました。

資料

[1] パーリの原始仏教聖典の数

経蔵	17,520	
DN.	34	
MN.	152	
SN.	7,762	* <i>Samantapāsādikā</i> による。実数は約 3,000
AN.	9,557	* <i>Samantapāsādikā</i> による。実数は約 2,900
KN.	15	
律蔵	397	
比丘戒	227	
比丘尼戒	132	* 比丘尼に独自のもののみ
犍度	22	
附随	16	
合計	17,917	* 実数は約 6,500

[2] 研究の経過

第1期：準備期（平成4年～平成5年）

第2期：データ蓄積作業期（平成6年～平成10年）

第3期：基礎研究作業期（平成11年～平成14年）

第4期：基礎研究作業+個別研究作業期（平成15年～平成21年）

第5期：まとめ（平成22年）

[3] 研究の成果

(1) 「中央学術研究所紀要」モノグラフ篇「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」全16冊

第1号「基礎研究篇Ⅰ」1997（平成9）年7月刊

【論文1】「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」の目的と方法論 森 章司

【論文2】原始仏教時代の暦法について 森 章司

【論文3】釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日 森 章司

【資料集1-1】原始仏教聖典に見られる年齢記事一覧〔Ⅰ〕——“*Jātaka-aṭṭhakathā*”篇 中島克久

第2号「資料集篇Ⅰ」2000（平成12）年7月刊

【資料集2-1】原始仏教聖典の仏在処・説処一覧——マガダ国篇 金子芳夫

第3号「資料集篇Ⅱ」2000（平成12）年9月刊

【資料集3】仏伝諸経典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧 森 章司・本澤綱夫・岩井昌悟

第4号「資料集篇Ⅲ」2001（平成13）年11月刊

【資料集2-2-1】原始仏教聖典の仏在処・説処一覧——祇園精舎（経蔵）篇 金子芳夫

第5号「資料集篇Ⅳ」2002（平成14）年5月刊

【資料集2-2-2】原始仏教聖典の仏在処・説処一覧——祇園精舎（律蔵）篇 金子芳夫

第6号「基礎研究篇Ⅱ」2002（平成14）年10月刊

【論文4】由旬 (*yojana*) の再検証 森 章司・本澤綱夫

【論文5】原始仏教聖典資料に記された釈尊の雨安居地と後世の雨安居地伝承 岩井昌悟

【資料集1-2】原始仏教聖典に見られる年齢記事一覧〔Ⅱ〕 中島克久

第7号「基礎研究篇Ⅲ」2003（平成15）年11月刊

【論文6】原始仏教聖典におけるバラモン修行者——*jaṭila*（螺髻梵志）と *vānaprastha*（林住者）—— 森 章司

【論文7】『仏説十二遊経』の仏伝伝承——成道後12年間の雨安居地を中心にして—— 岩井昌悟

第8号「資料集篇Ⅴ」2004（平成16）年3月刊

【資料集2-3】原始仏教聖典の仏在処・説処一覧——コーサラ国篇 金子芳夫

第9号「個別研究篇Ⅰ」2004（平成16）年5月刊

【論文8】摩訶迦葉 (*Mahākassapa*) の研究 森 章司・本澤綱夫

【論文9】「半座を分かち」伝承について 岩井昌悟

【資料集4】古典インド法典類の年齢記事資料——幼児期の浄法 (*saṃskāra*) と住期 (*āśrama*) を中心に—— 中島克久

第10号「個別研究篇Ⅱ」2005（平成17）年4月刊

【論文10】*Mahāpajāpati Gotamī* の生涯と比丘尼サンガの形成 森 章司・本澤綱夫

【資料集5】原始仏教聖典における釈尊の雨安居記事 岩井昌悟

【資料集6】本縁部経典に見られる年齢記事一覧 中島克久

第11号「個別研究篇Ⅲ」2006（平成18）年10月刊

【論文11】提婆達多 (*Devadatta*) の研究 森 章司・本澤綱夫

【論文12】阿難以前の侍者伝承と雨安居地伝承 岩井昌悟

第12号「資料集篇Ⅵ」2007（平成19）年4月刊

【資料集7】*Visākhā Migāramātā* 関係資料 岩井昌悟・本澤綱夫・カタプンニョー比丘

第13号「基礎研究篇Ⅳ」2008（平成20）年3月刊

【論文13】「仏を上首とするサンガ」と「仏弟子を上首とするサンガ」 森 章司

【論文14】「釈尊のサンガ」論 森 章司

【論文15】パーリ仏典に見る *janapada* と *raṭṭha* 森 章司・金子芳夫

第14号「基礎研究編V」2009（平成21）年5月刊

【論文16】遊行と僧院の建設とサンガの形成 森 章司

【論文17】釈尊雨安居地伝承の検証 岩井昌悟

【論文18】釈尊雨安居地伝承の総括的評価 森 章司

【論文19】コーサンビーの仏教 森 章司・本澤綱夫

第15号「資料集篇VII」2009（平成21）年10月刊

【資料集2-4】原始仏教聖典の仏在処・説処一覧——その他国篇 金子芳夫

第16号「基礎研究編VI」2010（平成22）年1月刊

【論文20】サンガにおける紛争の調停と犯罪裁判 森 章司

【論文21】紛争解決法としての多数決とその理念 森 章司

【論文22】原始仏教聖典などにみる就学・結婚などの平均年齢——原始仏典、*Jātaka-aṭṭhakathā*、
本縁部経典、インド法典などを資料として—— 森 章司・中島克久

(2) 外部の研究誌での報告

「コーサラ国波斯匿王と仏教——その仏教帰信年を中心に」森 章司（『印度哲学仏教学』第21号
北海道印度哲学仏教学会 2006年10月）

「釈尊のサンガは存在したか——『現前サンガと四方サンガ』序説」森 章司（『福田亮成先生古
稀記念 密教理趣の宇宙』智山勧学会事務局 2007年3月）

「『現前サンガ』と『四方サンガ』」森 章司（『東洋学論叢』第32号 東洋大学文学部 2007
年3月）

(3) 立正佼成会内部資料＝非公開（2010年11月30日）

①「釈尊および釈尊教団史年表」1冊

②「釈尊年齢にしたがって配列した原始仏教聖典目録」全5冊

「第Ⅰ部 説時による目録」（第1分冊）：過去世～釈尊47歳

「 同 」（第2分冊）：釈尊48歳～50歳

「 同 」（第3分冊）：釈尊51歳～57歳

「 同 」（第4分冊）：釈尊58歳～入滅後

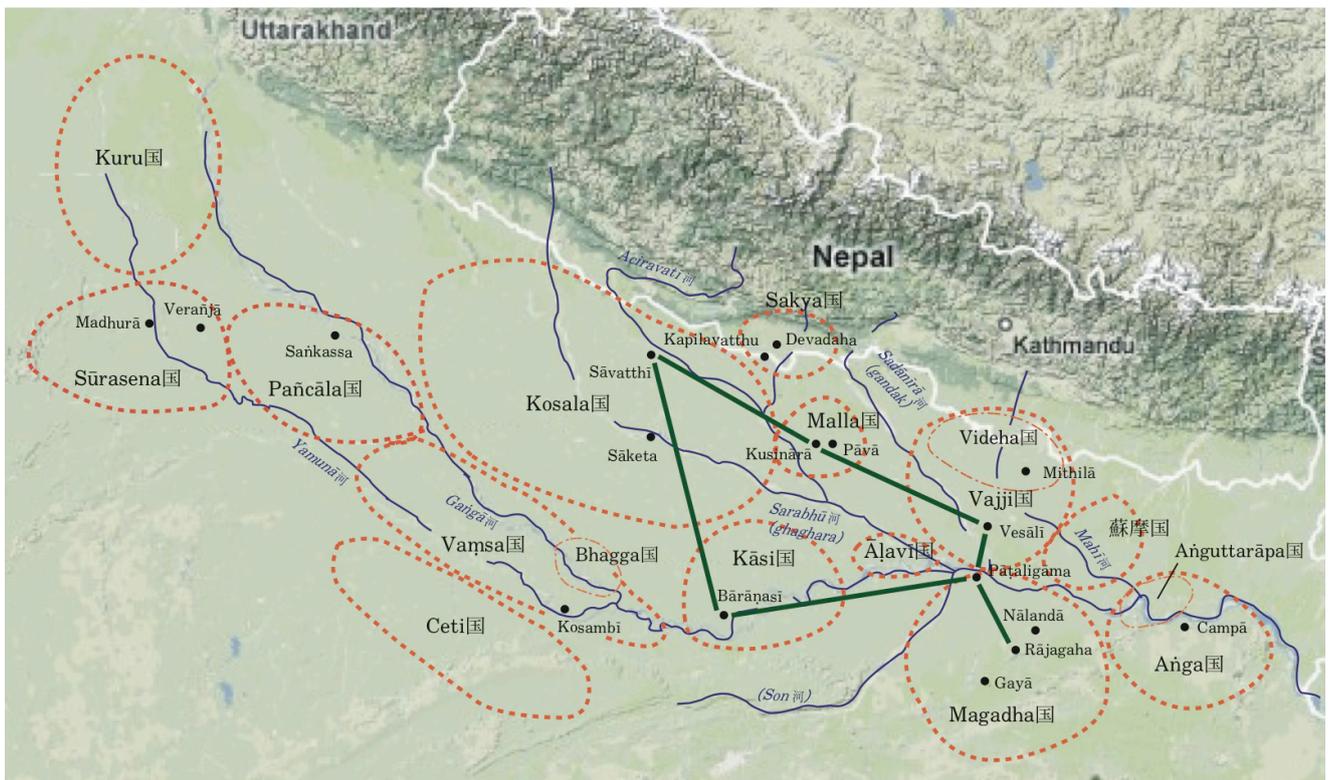
「第Ⅱ部 回想・参考記事による目録」：過去世～入滅

[4] 原始仏教聖典の仏在処・説処

舎衛城を舞台とする仏説の原始仏教聖典＝5784/10861＝53.25%

王舎城を舞台とする仏説の原始仏教聖典＝3539/10861＝32.58%

[5] 仏教中国略地図



[6] 羯磨（パーリ：kamma、サンスクリット：karma）の成立要件

- ①議題に必要な人数が揃っており、
- ②その時点にその界（simā 縄張り）にいるサンガの構成員が1人の漏れもなく出席していて、
- ③その全員が賛成する。

[7] 釈尊教団形成・発展史年表

年齢	成道年	時期	記 事
35	1	2/15	成道＝三宝帰依の「仏宝」成立。
36	2	安居前	初転法輪＝「法宝」の成立。 五比丘が「善來具足戒」によって比丘となる＝「釈尊と直弟子たちのサンガ」成立
		安居後	五比丘が心解脱を得て「世間に阿羅漢は6人となる」＝「帰依の対象となるサンガ」（僧宝）の成立 「1つの道を2人していくなかれ」と弟子たちを布教に出し、自らはウルヴェーラーに戻る。
37	3	安居後	三迦葉を教化し、1000人の仲間を「善來具足戒」によって比丘とする。

～	～		ガヤーシーサにおいて弟子たちを教育しながら、布教に出した弟子たちが出家希望者を連れて帰ってくるのを待つ。
43	9	安居後	「三帰依具足戒」によって仏弟子たちが地方で自分の弟子を取ることを許す＝ 「 仏弟子たちのサンガ 」祖形の成立＝釈尊が行動の自由を得て、釈尊自らも布教に乗り出す。 マガダ国のビンピサーラ王が帰信する＝仏教がインド社会において公認される。
44	10	安居前	ビンピサーラ王が竹林園を「釈尊と直弟子たちのサンガ」に寄進する。
46	12	安居前 安居後	世間から「夫を奪い、子を奪い、家系を断絶させる」という非難と、宗教家らしからぬ不行儀に対して非難が起きる。 「十衆白四羯磨具足戒」を制定する＝正式なサンガ（「 仏弟子たちのサンガ 」と「 釈尊教団 」）の成立＝サンガの運営の基本規定と布薩や雨安居の制の制定 王舎城の長者が竹林園に僧院を建設し「四方からやって来るサンガ」に寄進する。
48	14	安居前	成道後初めてカピラヴァットゥに帰郷し、ラーフラを出家させる。 給孤独長者が祇園精舎を「四方からやって来るサンガ」に寄進する。
54	20	安居後	阿難を「釈尊教団」の侍者（秘書室長）として任命する。
57	23	安居前	波羅夷第1条を制定する＝波羅提木叉制定の最初
58	24	安居後	マハーパジャーパティー・ゴータミーが比丘尼となることを許す。
60	26	この頃	マハーカッチャーナがアヴァンティに向けて出発する＝仏教中国以外の地方への布教活動が始まる。
61	27	安居後	比丘尼たちが新参比丘への礼拝について要請したのを契機として、比丘尼の出家具足戒法を制定し、正式に「比丘尼サンガ」が成立する。
65	31	安居後	地方での「五衆白四羯磨具足戒」を制定する。
69	35	安居後	コーサンビーにおいて破僧事件が起き、釈尊の調停が不調に終わる。
72	38	安居後	提婆達多が五事を主張して釈尊に反逆する。
79	45	4/15 安居後	（入胎を誕生とする満80歳誕生日を迎えられ）重い病気にかかる。 「私の説いた法と律が我がなき後のあなた方の師である」と遺言される。
80	2/15	2/15 安居中	（出胎による満80歳の誕生日に）入滅。 500人の長老比丘たちが王舎城において「法と律」を結集する＝「釈尊教団」から「 仏教教団 」となる。